

看護学臨地実習における指導者・教員および学生の体験についての調査研究

湯舟 貞子 貞岡 美伸

看護教育学

A Research on Experiences of Clinical, Teachers and Students in Nursing Practice

Sadako YUFUNE Minobu SADAOKA

(1999年11月10日受理)

実践の科学である看護の基礎分野において、臨地実習はそれまで習得した知識、技術、看護観を統合し対象に対して看護ができるように教育する重要な場でもある。しかし、現代の若者気質、「無気力」「無関心」などの特性をもつ学生を指導する上で指導者が「何に困り」また逆に「感心したり、感動したりしたことは何か」を把握するとともに、臨地実習でとりわけ臨床の学びの中での「学生の変化」について意識調査をおこなった。2つの結果を見ながら、今後の臨地教育のあり方を考える。

はじめに

看護教育における重要な学習課題の一つである臨地実習、この実習教育の中で臨床指導者及び教員の教育的役割は大きいと考える。今回、日々の学生指導の場面で直面する指導上の問題や悩み、また逆に学生指導を通して得られる学びや感動を知ることによって、今後の指導に役立てたいと考えた。調査結果より実習指導で困っている人たちの中においても学生の実習態度で感動したと答えた者も多いことから、それだけ熱心に学生に関わろうと考えていることが分かった。Ⅰでは学生指導を通して得られた学び、感動についての報告を、次にⅡで看護学生の特性と実習での「学生の変化」についてを報告する。

Ⅰ 学生指導を通して得られた学び

1. 研究方法

1) 調査対象

某県下の看護学校の教員及び実習病院の臨床指導者に、講演会「現代の若者論とかかわり方」の講演にさきがけアンケート調査をする。回答者は看護教育にたずさわる専任の看護教員77名、および看護学生の実習を受け入れている病院の臨床指導者152名を対象にした。

アンケートの内容は①学生指導をしていて最も困ったこと、(何時・どこで・内容・その時何を思い・どう考えたか・またどうしたか)、②学生指導をしていて、学生から教えられたり、感心させられたと思うことの2項目について自由記入方式で記載し、集計は記載された内容をKJ法的に分類し、素集計およびクロス集計をした。

2) 調査方法

質問紙は①日々直面している学生指導の問題や悩みについて②学生から教えられたり感心させられたと思うことの2項目について無記名の自由記載方式で求めた。分析は①および②についてキーワードでカード化しKJ法的に分類して各群にネーミングした。なお①の学生指導上の問題や悩

表1. 教員・指導者の年代別役割経験年数

役割経験年代	教員 n=76 名			指導者 n=127 名			計
	0~3年	4~7年	8年~	0~3年	4~7年	8年~	
20~29	6	1	0	43	5	0	55
30~39	26	13	1	29	8	6	83
40~49	5	6	17	11	9	12	60
50~59	0	1	0	0	1	3	5
計	37	21	18	83	23	21	203

表2 学生指導を通して知る学び・感動に関する調査結果(素集計) 回答数 237

I. 学生からの学び=58名(28.6%)

1. 学生の援助内容を通し業務に流されている
看護婦としての振り返りが出来る=34名(16.7%)
2. 学生の関わりにより、患者の態度の変容=15名(7.4%)
3. 指導者の助言により、学習意欲の向上に繋げる=4名(2.0%)
4. カフェやプロセスを通し、知らなかった学生の良い面が見える
=3名(1.5%)
5. 教員や指導者の一言が学生の心を深く傷つけている=2名(1.0%)

II. 人としての心の豊かさを持ち合わせている=31名(15.3%)

1. 素直な気持ち=10名(4.9%)
2. 配慮ができる=6名(3.0%)
3. 感性の豊かさ=5名(2.5%)
4. 新鮮な受け止め=4名(2.0%)
5. 良い聞き手になろうと言う努力=3名(1.5%)
6. 挨拶ができる=2名(1.0%)
7. 発想の豊かさ=1名(0.5%)

III. 1人の患者に多くの時間接する=29名(14.3%)

1. 看護婦の知らない情報を多くもつ=13名(6.4%)
2. 患者に適した援助ができる=6名(3.0%)
3. 深い気づきができる=4名(2.0%)
4. 細かい観察ができる=3名(1.5%)
5. 信頼関係を作ろうと努力する=3名(1.5%)

IV. 一生懸命な姿=26名(12.8%)

1. ケアをしている姿=10名(4.9%)
2. 関ろうとする態度=5名(2.5%)
3. 患者の気持ちになって考えられる=5名(2.5%)
4. 手術前・分娩前の関わりがその後の看護に生かされる=4名(2.0%)
5. 共に乗り越えようとする姿勢=2名(1.0%)

V. 工夫ができる=21名(10.3%)

1. 食事・運動・入浴・安静に対する工夫=9名(4.4%)
2. パンフレットに行方を入れ理解しやすい工夫=7名(3.5%)
3. 物品(自助具・人形等)の作成=5名(2.5%)

VI. 学ぼうとする努力=21名(10.0%)

1. 学ぶ姿勢を持つ=11名(5.4%)
2. 活発に自分の意見を述べる =6名(3.0%)
3. 指導されたことを生かす=3名(1.5%)
4. 患者との関りが学生の学習意欲に繋がる=1名(0.5%)

VII. 教員・指導者自身の振り返り=7名(3.5%)

1. 助言不足がそのまま返る=3名(1.5%)
2. 先入観で学生を見ていたことへの反省=2名(1.0%)
3. グループに注意を促して欲しいと指導観を問われる発言=1名(0.5%)
4. 看護衣の胸ポケットの危険性への指摘=1名(0.5%)

VIII. グループ内での向上=5名(2.5%)

1. グループメンバーで話し合うことにより問題解決している姿=3名(1.5%)
2. メンバーへの思いやり=1名(0.5%)
3. 団結しようとする姿=1名(0.5%)

IX. その他=5名(2.5%)

1. 記録ができる=2名(1.0%)
2. おしゃれ=1名(0.5%)
3. 積極的である=1名(0.5%)
4. 資源の活用=1名(0.5%)

みについては別途に行うので今回は取り上げない。回収数は、237名この内無回答34名を除き分析対象を203名とした。

2. 結果

1) 調査対象の特性

表1は調査対象の特性を、教員および指導者の年代別役割経験年数で表わしたものである。表に示すとおり、年齢20～30歳代で役割経験が4年未満の者が約半数をしめていた、なお、教員養成課程あるいは実習指導者講習会を修了した者は全体の59.4%である。

2) 学び・感動体験

表2に学生指導を通して知る学び、感動体験を

分類した結果を示した。

(1) 教員・臨床指導者としての学び

「学生からの学び」が、第1位58名(28.6%)であり、この内訳は「学生の援助内容を通し、業務に流されている看護婦としての振り返りができる」34名(16.7%)。次に「学生が患者と関ることにより、患者の態度変容がみられる」。これには学生が関わっている間は良い方向に向かいつつある患者が、実習が終了し受け持ちを離れると意欲減退をおこすのはスタッフとして考えていかなければならない、とコメントをしている指導者の意見が多くあった15名(7.4%)。第2位は「人として心の豊かさを持ち合わせている」31名(15.3%)。内訳は、「素直な気持ちで受け止める」がこ

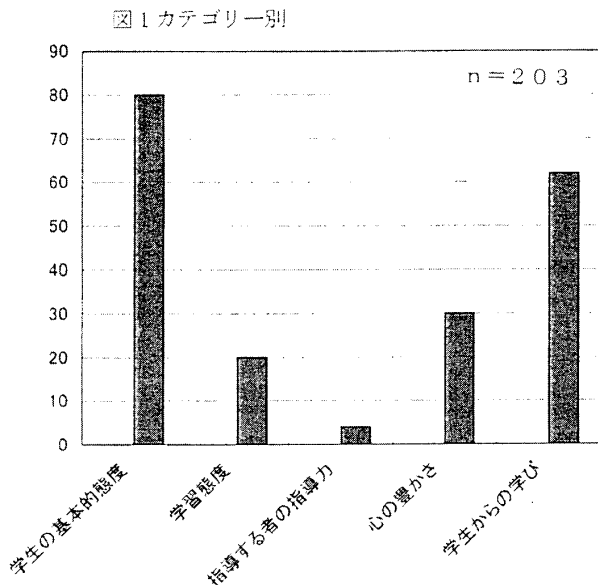
のうち10名（4.9%）を占めていた。
次に、「1人の患者に多くの時間を接する」が29名（14.3%）このうち、「看護婦の知らない情報を多く持っている」13名（6.4%）。次いで「患者に適した援助ができる」「深い気付きができる」等であった。

（2）教員、指導者自身の学び

「助言不足がそのまま返ってくる」が第1位であり、第2に「教員、指導者の一言が学生の心を深く傷つけている」。第3が「先入観で学生を見る」ことへの反省となっていた。

3) カテゴリー別 図1

- a. 多くの時間患者に接し、一生懸命に工夫を重ねグループとして向上できる、努力をしようとする項目を合わせ実習の基本的態度とした。
- b. 患者との関わりを大切に、常に学ぶ姿勢を持ち指導された事を生かそうとする学生としての学習態度。
- c. 教員、臨床指導者としての指導力の振り返り。
- d. 感性が豊かで、配慮できる心の豊かさをもち合わせていることへの気づき。
- e. 学生の実習を通して知る教員、指導者として



の学び。

上記のカテゴリー別に分類すると図1のようになる。

4) 年齢別感動体験 図2

- i 学生の実習の中での学びや、感動体験を持った教員・臨床指導者は全体の85%を占めている。
- ii 年齢別には、35～39才の年齢層に感動体験が少なかった。

5) 要素別、感動体験の比率

学生を指導していて困った場面で教員や指導者がどのような対応の仕方をしているかを示したものが図3である。共感的理解を示している者、自己中心的に考えている者別に感動体験を見ると図4のようになる。共感的理解とは学生と共に考え問題解決をしようとするものであり、自己中心的とは何か困った問題を自分で解決しようとしているが、悩んで・苦しんでいるのみで、問題解決に向けて学生と関われない者、表に示してはいないが年齢の高い者に多く、立場上悩みをもっていく場がなく問題を抱えこんでしまっており、この傾向は教員に多かった。また、指導者の場合は悩む

図2 年齢別感動体験

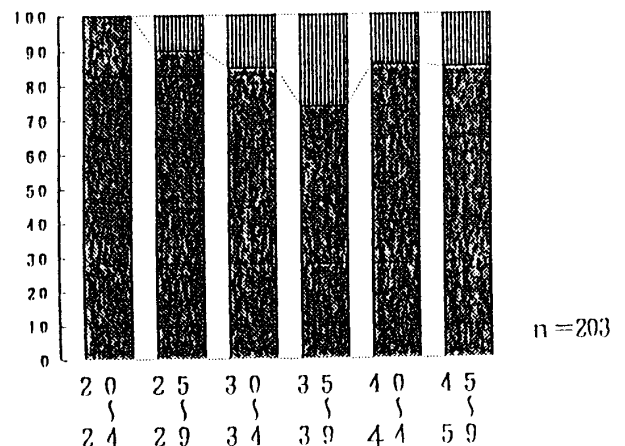


図3 要素別感動体験

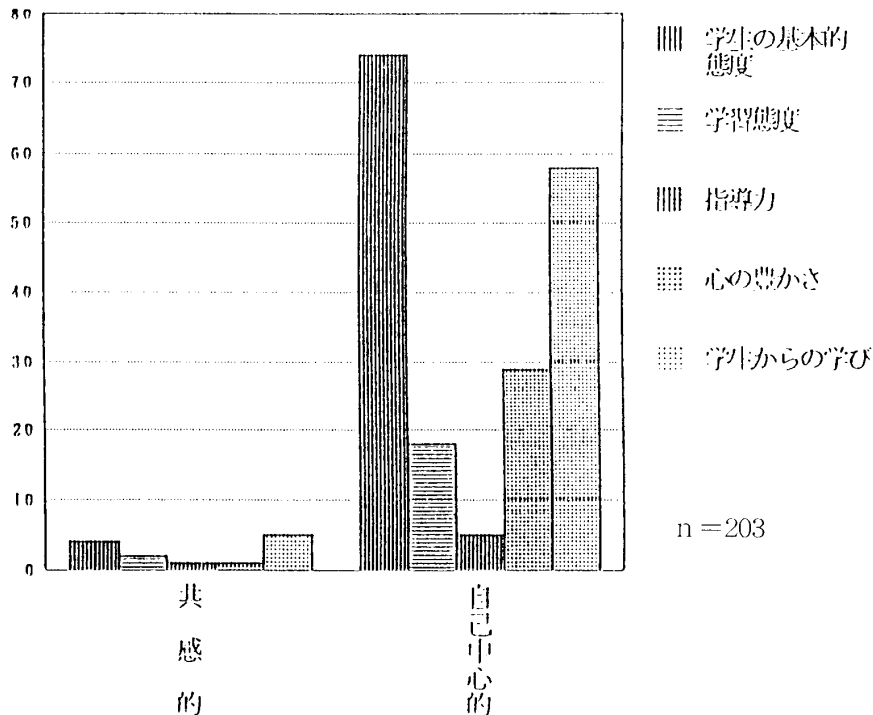


表3 困ったこと・感動体験 (クロス表)

n = 230 (%)

感動 困難	基本態度	学習態度	指導力	心の豊かさ	学生の学び	回答無	総数
実習に必要な知識・技術	34 (30.1)	7 (6.2)	5 (4.4)	16 (14.2)	33 (29.2)	18 (15.9)	113
判断力不足	13 (37.8)	4 (8.9)	1 (2.2)	5 (11.1)	16 (35.6)	6 (13.3)	45
指導者の指導力不足	20 (48.8)	6 (14.6)	0	5 (12.2)	7 (17.0)	3 (7.3)	41
学習態度上の問題	5 (27.8)	1 (5.6)	0	3 (16.7)	5 (27.8)	4 (22.2)	18
教員自身の問題	1 (20.0)	1 (20.0)	0	1 (20.0)	0	2 (40.0)	5
回答なし	2 (25.0)	1 (12.5)	1 (12.5)	0	2 (25.0)	2 (25.0)	8
総数	75	20	7	30	63	35	230

パターンは教員に比べて他者依存パターンが多く、「指導者として伝授すべき事は教えるが、最後のフォローは教員に任せる」という学生との関係を放棄する傾向が見られた。双方共に共感的理解のできる者が少なく、殆どが自己中心的なものの考え方をしている。

6) 困難別、感動体験の比率 表3 図4

困難(実習中に学生指導で困っている)と、感動体験をクロスし比較すると、「実習指導をする上で困っている」と答えた人達の中に、「学生

の基本的な実習態度に感心」と答えた人、また、「学生への援助内容を通し業務に流されている看護婦としての振り返りが出来る」等、実習を通して学生からの学びがあったと考えている者が多かった。

3. 考察

看護婦を目指し今、学びの途上にある看護学生に対し、教員・指導者が臨地実習の中で学生の姿

をどのように捉えているかを分析した。

- ①感動した場面の多くは、患者との関わり合いの中で、一生懸命に援助している学生の姿を見たとき、そしてその関わりが患者自身の回復意欲に繋がったときであり、意欲を持ちはじめた患者が実習終了により意欲の減退を起こした時、看護婦として自分自身への振り返りを感じる。等、実習を通して指導者は学生からの学びが大きい。
- ②最近の学生は利己的で、友人同志の繋がりが稀薄であると言われていたが¹⁾看護学生の場合、1人の学生が困っているとグループ内で協力し全体の問題として解決しようとする。
- ③素直さは、教員・指導者の言動をお手本と感じる危険性を持ち合わせている。
- ④適時適切な指導の必要性。例えば、死後の処置(小児)を通し、指導者は子供が親にとってか

けがえのない命であったことについて話す。この後学生は記録の中に人の死・母親の気持ち・自分自身の生き方について考える事ができるようになる。

- ⑤年齢別には、年齢層の若い人程感動体験が多く、一方35～39歳の層に「感動なし」が多い。この時期は職場でもある程度の責任を持ち、多忙である上に私的な多忙さが相まって十分に学生を見る事が出来ない為ではないだろうか。
- ⑥困ったこと(学生指導上問題や悩み)の現象が起きたとき、教員や指導者がその問題をどのように捉え解決しようとしているのかを、共感的な見かたとする群と自己中心的な見方をする群別に感動体験を比較すると圧倒的に自己中心型の人が多い。しかし、共感的・自己中心的別にそれぞれの感動体験を比率比較するとほぼ同率であった。このことから、どちらの要素を持つ

図4 困ったこと・感動体験 n=230

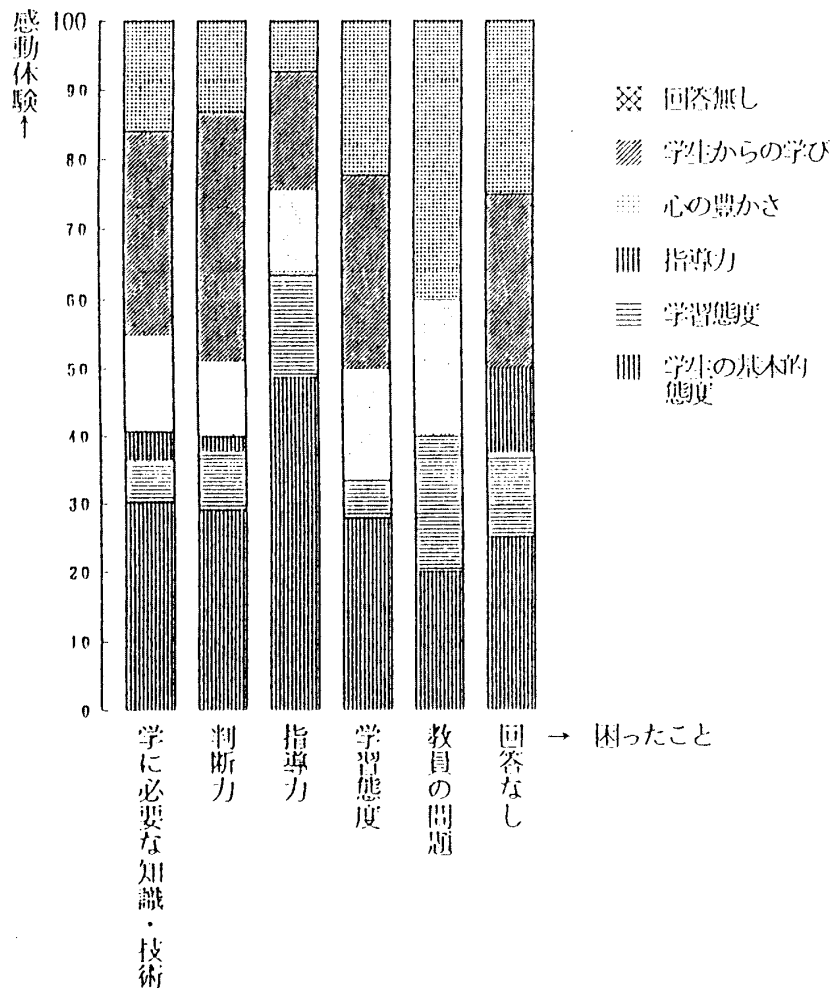


表4. 実習前に比べて「ほぼ」あるいは「完全に」できるようになったと
自己評価した学生の人数 (%)

	2年課程 n=390 (%)	3年課程 n=226 (%)
1 日常生活援助	219 (56.2)	141 (62.4)
2 患者とのコミュニケーション	247 (63.3)	157 (69.5)
3 自己を客観的にみつめる	177 (45.4)	96 (42.5)
4 困った時、人に援助を求めることができる	215 (55.1)	151 (66.8)
5 実習記録を上手にとる	115 (29.5)	51 (22.6)
6 責任感をもって行動する	235 (60.3)	139 (61.5)
7 忍耐力をもって行動する	248 (72.8)	139 (61.5)

ている人であっても、感動内容に変わりがなかったといえる。

⑦困った事と感動体験のクロスでは、指導者・教員が指導力の不足と答えたものの約半数が、学生の一生懸命さに感動したと答えたものが多い。これは、それだけ学生を肯定的に見ようとしているからであろう。

⑧看護教育内容が、他者（外来講師）に依存する教科が多く、臨床での教育が学習そのものに対する指導より、態度の指導が主になっているからではないだろうか。

教員および臨床指導者が実習指導を通し関わることでできた学びについては以上である。

II. 看護学生の特性と実習での学生の変化

次に学生自身が実習を体験することによって自分の考えがどのように変化していくのか、またその変化要因は何なのかを、またその基にある看護学生の特性が、それらの変化にどのように影響しているかを明らかにしたいと思い看護学生を対象に調査した。

1. 研究方法

- 1) 調査期間：前回の教員・臨床指導者へのアンケート調査の期間と同じ。
- 2) 調査対象：同じ某県の2年課程3年課程に在学する看護学生616名（2年課程390名・3年課程226名の卒業前調査）
- 3) 調査方法：アンケートによる集合調査

2. 結果

(1) 実習前に比べて「出来るようになった」程度

表4の7項目について、5段階評定をさせた。評価基準は1. 実習前と同じ、2. 少しだけできるようになった、3. 普通、4. ほとんど出来るようになった、5. 完全に出来るようになった、とした。

両課程の間にあまり差はないが、2年課程で一番出来るようになったのが「忍耐力を持つて行動できるようになった」である。次いで「患者とのコミュニケーション」「困ったとき人に援助を求めることが出来る」「日常生活の援助」となっている。

双方ともに「実習前と同じ」と答えたのは、「実習記録を上手にとる」ことであり、これは専門的知識を基に、対象の状態を捉え、必要な看護を判断し実践した結果を評価するという難しさがあ、また評価の多くがこの実習記録を介して行われているため評価がそのまま未達成感に繋がってきたと思われる。

次に表4の同じ1～7の項目について、「実習を通し今後もっと身につけなければいけない」と思っている項目について質問したところ両課程にあまり差はなく、一番多かったのが「自己を客観的にみつめること」次いで「責任感、忍耐力をもって行動すること」であった。

(2) 志望動機と学生の背景

1) 看護婦を目指している主な理由

看護婦を目指す理由の上位10位までをみると、看護婦を目指す動機の第1位は、両課程とも「技術が身につく資格が取れる」が一番多く、次い

表5. 学生もしくは家族の入院経験

(無効1)

	2年課程 n=390(%)	3年課程 n=226(%)
1. 自分自身が入院した経験がある	133 (34.1)	70 (31.9)
2. 家族の人が入院した経験がある	310 (79.5)	178 (78.8)
3. だれも入院したことがない	48 (12.3)	30 (13.3)

で多いのが2年課程では「結婚しても続けられる」「人のために役立ちたい」「人間相手の仕事をしたい」と続いており、3年課程では「人のために役立ちたい」「人間相手の仕事がしたい」が2位、3位をしめ、2年課程の第2位「結婚しても続けられる」は、3年課程では第4位になっている。

- 2) 「あなたの家族、または非常に親しいお知り合いの中で看護職についている人、或いは就いていた人がいますか」に関して「いる」と答えた者、2年課程233名57.0%、3年課程119名52.7%と両課程ともに半数以上が身近に看護職に就いていることがわかった。
- 3) 「あなた、もしくは家族の方の入院経験がありますか」に関しては、表5のように2年課程・3年課程共にほぼ同数を示しており、自分や家族の入院によって病院の中で実際に働いている看護婦を見ていたことが看護学校志望動機の一因になっているのではないかと考える。
- 4) 「あなたの家族（または非常に身近な親戚）非常に親しい友人の方の“死”を経験したことがありますか」については両課程ともに「ある」と答えた者73.3%と、学生の年代が20歳代前半であることを考えると数字としてかなり多く、家族の“死”を経験しており、志望動機の一因となっていることも合わせて考えられる。

3. 考察

- 1) 看護学生は自分や家族が病気になったり、身近な人の死が看護婦志望動機の一因となっている。これは病気の人を見舞いに病院を訪れた時、そこで白衣姿の看護婦と出会い、魅力を感じるという経験が、「人のために役立ちたい」「人間相手の仕事がしたい」と言う動機を形成していると推測される。

- 2) 看護婦を目指す主な理由の第一は、両課程とも「技術が身につく資格が取れる」であり、次いで多いのが2年課程では「結婚しても続けられる」「人のために役立ちたい」「人間相手の仕事がしたい」と続いており3年課程では「人のために役立ちたい」「人間相手の仕事がしたい」が2位3位をしめ2年課程の2位「結婚しても続けられる」は3年課程では第4位になっている。
- 3) 看護婦に対するイメージについては、2年課程・3年課程ともに「仕事がきつい」「肉体労働」ではあるが「やりがいのある仕事」であり看護婦は「忍耐強く」「優しく」「明るい」と受け止めている。
- 4) 実習で何が学べたか、については2年課程では第一に「忍耐力をもって行動できるようになった」次いで「患者とのコミュニケーションが取れるようになった」「責任をもって行動できるようになった」と続いている。3年課程では「患者とのコミュニケーションがとれるようになった」「困ったときに援助を求める事ができる」「日常生活の援助ができるようになった」と答えた者が多い。
- 5) 今後もっと身につけなければいけないことに関しては、両課程に「自己を客観的に見つめること」次いで「責任感、忍耐力をもって行動すること」であった。

III. まとめ

実習指導を通しての学び感動を臨床での指導に当たる指導者や看護学校教員に、また看護学生には臨床実習の中で何が学べ、また学生自身が変化していくのかをアンケート調査を基に考察した。そこには志望動機はさまざまであるが看護婦を志

す多くは「人間が好きで」「人間相手の仕事、人のために役立つ仕事をしたい」と答えた者が多い。また、実習を展開することにより「相手を知るためには自分自身を知ることが大切である」と答えている看護学生の姿があった。このような看護学生を臨床現場で指導を通し指導者としての思いを通すと、そこには「素直な気持ちで」「相手の立場に立って」「懸命に学ぶ」学生の姿が浮かび上がった。

最近の若者は、理解しているのみで実践がなく、指示を受けるまでやらない。知性偏重の中で育てており創造性がない、友人同士また縦のつながりがなく連帯感を持ちにくい、など世論の中で若者像が鮮明に出されているが、アンケートを通して同じ若者である看護学生像は、指導者や教員の目を通すと、素直な気持ちで・相手の立場に立って懸命に学ぶ・創造性を働かせて多くの工夫をするなど、より良い看護を目指そうとする姿がそこにあった。

参考文献

- 1) 頼藤和寛:現代若者論とかかわり方. 兵庫県看護学校教務主任協議会講演会冊子. 1994
- 2) 大学基準協会:看護教育に関する基準. 大学基準協会第44号. 1994
- 3) 豊山大和:新しい教育学. 学文社. 1992
- 4) 上原貞雄:教育原論. 教育科学講座12巻. 福村出版. 1992
- 5) 見藤隆子:看護教育のあり方に関する調査研究報告書. IV章51 - 62. 1991